エヌ・アイ・イー
わかやまNIEだより

Newspaper in Education 第23号 2023.2 和歌山県NIE推進協議会

事務局:〒646-8660 和歌山県田辺市秋津町100 紀伊民報社内 TEL.0739-24-7171 FAX.0739-25-3094 E-MAIL:nie@kiiminpo.jp

新聞の購読率の低下のなかでのNIEの意義とあり方

和歌山県NIE推進協議会会長 和歌山大学教育学部教授 船越 勝

朝食を食べながら、新聞の見出しにざっと目を通し、通勤電車の中で関心のある記事をじっくり読む。一昔前まで当たり前だった新聞をめぐる風景が、今やすっかり変わってしまった。アップル社がiPhoneを発売したのは2007年だが、この15年程の時間の経過のなかで、通勤電車の「お供」は、スマートフォンに取って代わられたのである。なぜなら、スマホさえあれば、ニュースのヘッドラインが必要な情報を自動的に知らせてくれるからである。私が通勤に使っている電車のなかでも、ほとんどの乗客がスマホとにらめっこをしている風景になっている。

それを裏付ける調査結果もある。公益財団法人新聞通信調査会が2022年11月に発表した新聞の購読率（月極で新聞を購読）に関する調査は、58.3％という結果になった。10軒に6軒もないという状況である。また、一般社団法人日本新聞協会の調査でも、2022年10月の普及度（1世帯当たりの部数）に関する調査は、全国平均で0.53という結果で、同様の傾向を示している。とうとう「社会の公器」と言われた新聞の役割も、ずいぶん低下してしまったと言うべきなのであろうか。しかし、先の新聞通信調査会の調査には、新聞をめぐるまた違った調査結果も示されている。それは、各メディアの情報をどれくらい信頼しているかである。調査方法は、「全面的に信頼＝100点、全く信頼していない＝0点、普通＝50点」として評価したところ、第1位はNHKテレビが67.4点。新聞は67.1点で僅差の第2位。スマホなどのインターネットは、48.9点という結果となった。ここから読み取れるのは、多くの人は便利だからスマホなどインターネットを使って情報を得ているが、その情報は必ずしも信頼しているわけではなく、信頼するメディアとしては新聞は高い位置にあるということである。

この新聞通信調査会が2020年に発表した「第13回メディアに関する全国世論調査」の結果には、さらに興味深いものがある。それは、新聞の地域別の普及度と世代別の購読率である。まず私は地域によって新聞の普及度に大きな差があるということは、あまり予想していなかったが、実際にはずいぶん差があることがわかった。富山・石川・福井や長野、鳥取・島根などは約0.9部となっており、東北日本海側・北関東・中部・山陰地方が高いという結果が出ている。こうした都道府県別の新聞の普及度は、日本新聞協会の調査でも、島根0.85、富山0.84、石川0.82、福井0.81、長野0.79、山形0.75、群馬0.72、秋田0.69など同様の結果となっている。（和歌山は0.58）都道府県別の新聞の普及度は、その自治体の歴史的・文化的な風土や、県紙・地方紙や全国紙の支局の編集や営業努力も関わっているので一概に言うことはできないが、いわゆる学力調査の結果の上位県と一致していることが注目される。これまで学力調査の結果に関わっては、学校の努力だけでなく、家庭や地域の教育力、すなわち「社会関係資本」（social capital）が関わっていることが指摘されているが、新聞を読んだり、それが家庭のなかでの会話の話題に上ったりするのが当たり前の日常になっていることは、こうした社会関係資本や文化的な「ハビトゥス」（日常生活の認知、評価、行為を方向付ける性向のシステム）を強化することが予想される。

さらに注目すべきは、世代別の新聞の購読率で、最も高いのは、予想される通り、70代以上82.9％、60代77.7％と年齢の高い世代が高い購読率を示し、その後も50代が続くのであるが、実はその次は18～19歳の50.0％なのである。その後は40代と20代が同率で並び、最も低いのは30代の32.9％なのであった。30代が最も低いのは、仕事が最も忙しい世代であることが関係していると思われるが、18～19歳が予想に反して意外に高いのはなぜか。それは高校生である18歳や大学生や社会人1年目で高校の影響がまだ残っている19歳は、NIEの取り組みなど学校で新聞と出会い、親しむ経験を持っている影響からではないか。だとするのであれば、今まで以上に小学校から高校までNIEを通して、新聞を活用した学びを進めていくことが、結果的に和歌山の子どもたちの学力を高めていくことにもつながる。具体的な実践の切り口は、今号「わかやまNIEだより」所収の西浜中学や熊野高校の実践が参考になる。今年もNIEの実践を進めていこう。

新聞を活用した授業の取り組み

和歌山市立西浜中学校　教諭　新谷　麻里

ＮＩＥを実践するにあたり、まず生徒にアンケートをとることにした。家庭で新聞を購読しているか、新聞を読んだことがあるか、どのくらいの頻度で新聞を読むか、などである。新聞を購読している家庭は約半数であり、新聞をほとんど読んだことがないという生徒もいた。新聞は字が多く内容も難しいと苦手意識を持つ生徒も多かった。そのためまず総合の時間に新聞の構成について学習した。次に新聞を手にとることが大切だと思い、一人ずつに新聞を渡し、気になる新聞記事を切り抜き自分なりの意見を書くという取り組みを行った。また、社会科の授業ではスーパーのレジ袋有料化に関する新聞記事を読み、有料化に賛成か反対か考えさせた。その際テレビで見る街頭インタビューのように、丸シールを貼ることで楽しんで取り組める工夫をした。身近な題材だったため、記事の内容に興味を持つことができた。他にも授業と関係のある記事や生徒が興味を持ちそうな話題の記事を切り抜き、見出しをつけて廊下に張り出した。新聞が学校生活の一部として定着してほしいと考えたからである。各教室に新聞を置く場所を設け、いつでも手に取ることができる環境づくりも行った。さらに、校外学習のまとめを新聞形式にすることで、生徒一人ひとりの取り組みとして文化祭で展示することができた。1年目はとにかく新聞を身近なものにできるように取り組んだ。

実践2年目は、中学3年生ということもあり社会科の授業で新聞を活用する機会が増えた。特に衆議院議員総選挙の際には、教科書で学んだことが社会の動きとつながっていると実感できるよい機会となった。東京オリンピック・パラリンピックが開催された際には、多くの記事を切り抜き廊下に掲示した。競技の結果や、パラリンピックの競技紹介などは足を止めて読む生徒も多かった。その他、授業と関連する内容の記事を切り抜き、印刷して配布することで興味、関心を高めることができた。新聞の活用は授業の内容を深めることにもつながる。これを継続して行うことで生徒は新聞に親しみ、読むことへの抵抗感も少なくなり、むしろ集中して読むようになっていった。

新聞を活用する際に少し工夫をすることで生徒は楽しんで取り組むことができる。その例をいくつか紹介したい。1つめは自分の名前の文字を新聞から探し出すという取り組みである。昔の犯罪予告文のようになるのだが、生徒は楽しんで取り組んだ。2つめはクイズを出して考えさせ、答えは新聞を読むとわかるという取り組みである。選挙についての学習で、まず政党名をクイズ形式で考えさせた。一通り生徒から答えが出たあと、「ここに政党がそれぞれの主張を書いています。」と言って新聞記事を印刷したものを配布するのである。政党の正式名称などに興味を持ち、新聞記事をしっかりと読む様子が見られた。3つめはグループごとに新聞を配布し、協力して探すという取り組みである。株式会社について学習した後、新聞の経済面の株価表を配布した。知っている会社名に線を引くという取り組みなのだが、小さな文字を一生懸命読み、互いに協力して取り組むことができた。

私がＮＩＥを実践する際に大切だと思うのは、生徒の実態を把握し、新聞に親しむことができる取り組みを行うことである。次に身近な題材を取り上げること、そして授業の内容と関係のある新聞記事を取り入れることである。これを繰り返しながら、時々楽しい工夫をすることで新聞は生徒にとってより身近なものになる。また、新聞を教室に置いたり、新聞記事の切り抜きを廊下に掲示するなどの環境面での工夫も合わせて行うことでより効果は上がると思う。2年間の実践は大変なこともあったが、生徒が集中して新聞記事を読む姿は私にとって何よりの成果であった。

予告

和歌山県NIE推進協議会は、令和5年度から、「わかやまデジタルかべ新聞パーク」ウエブサイトを新たに開設します。これは、学校・学級や児童会・生徒会、クラブなどでの学習活動や取り組みをテーマにして、児童生徒が作ったかべ新聞等を募集し、ウエブサイトで公開することで、児童生徒に広域的な学習発表の場を提供することを目的としています。（個人作品はのぞきます）詳細は、4月以降、学校に作品募集要項やチラシをお送りしますので、ご一読のうえ、たくさんの作品の参加をお願いします。

第10回近畿NIE フォーラムに参加して

和歌山県立熊野高等学校　教諭　上村　桂

熊野高等学校は紀伊半島の西南部「上富田町」に位置し、総合学科と看護科が設置されている。令和４年度で創立１００年を迎え、「自立・共生・挑戦・貢献」を教育理念とし、ボランティア活動なども盛んな学校である。Ｋｕｍａｎｏサポーターズリーダーは、高齢者・学童・障がい者のサポート活動、防災など幅広い活動を通じて地域の絆作りや問題解決に取り組んでいる。

平成23年台風12号による紀伊半島大水害で、本校生徒が自宅裏山の深層崩壊により亡くなった。仲間の死を無駄にしないために、この災害の教訓を生かそうと活動を始めた。南海トラフ巨大地震が30年以内の発生確率は70～80％、和歌山県の死者は８万人と予想されている。そこで「すべての命を救うプロジェクト」を立ち上げ、多くの命を救おうとＡＥＤ設置施設の写真撮影・マップ作りと心肺蘇生術の啓発活動を行った。また地域の高齢者・学童・障がい者など災害時要援護者となりうる人々と普段から積極的に触れ合い、絆作りを行っている。毎年行われる上富田町との合同防災訓練では、全校生徒が主体的に取り組んでいる。

２０１９年の調査から、学校で生徒が心停止したときのＡＥＤ使用に対して、男子生徒の使用率が83．２％、女子生徒は55．６％ということを知り、この差を無くすためＡＥＤシートの開発を進めた。リサイクルを考え、校内の焼却場にあった廃棄傘を再利用し、消防署やＡＥＤ販売会社のヒアリングや試行錯誤を重ね、ＡＥＤシートが完成した。上富田町内69施設に配布し、さらに施設情報をオープンデータ化するため、再訪問し情報収集を行った後、個人パソコンを用いて部員全員でオープンデータ化した。また、同時にＷＥＢページを作成し、地域のみんなが使いやすいように、利用可能な曜日やエリアで絞り込みができるように工夫した。ＡＥＤシートはジェンダー格差についての課題解決策であり、ＡＥＤシートがあることによって傷病者が男女関係なくＡＥＤを使用できれば、さらに多くの命が救われると思い、さらに開発を進めた。ＡＥＤが到着する前に胸骨圧迫は必要なので、周りの注意をひいて救命活動に巻き込む際、１枚のシートがあると無いでは意識に大きな差が出て、結果として救命率にも影響すると思われる。そこで、普段から手軽に持ち運びが可能で収納しやすい携帯用ＡＥＤシートの開発に取り組んだ。これらの経緯をＮＩＥフォーラムで発表させて頂いた。

地域との絆作りから見いだした課題に対して、探究しアウトプットしたものが『創造物』となる。知財創造教育とは、地域社会の課題解決に生かそうとする「学びに向かう力」を引き出し、将来のキャリア発達・人間性の涵養につながる。探究的な学びも知財教育も、身近なもの（興味関心）から導入が可能だが、体験的・実践的且つ地域の課題解決に向けた実践体験から入るとよりやりがいと達成感につながる。教師と生徒は「未来の創り手という点では立場は同じ」と考え、学校内外の様々な人達と対話し世の中の全体像や未来像を描き、それに向けて自分達が果たしうる役割を探り協働する活動を精力的に取り組んでいきたい。

部活動でWebページを作成する生徒

第13回

「いっしょに読もう！新聞コンクール」の審査結果について

全国奨励賞　溝端（みぞばた）　一真（かずま）さん（和歌山市立紀之川中学校1年）

全国奨励賞　三原（みはら）　菜結（なゆ）さん（和歌山県立日高高等学校附属中学校2年）

優秀学校賞　海南市立東海南中学校

学校奨励賞　和歌山市立高松小学校・印南町立切目小学校
上富田町立市ノ瀬小学校
和歌山県立日高高等学校附属中学校

このたび日本新聞協会から、第13回「いっしょに読もう！新聞コンクール」全国審査会の結果が公表されました。全国から56,998編の応募があり、小・中・高校部門の最優秀賞を各1編（合計3編）、優秀賞を校種別に各10編（合計30編）、奨励賞を118編選んだと発表がありました。また、団体応募校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各校の合計15校、学校奨励賞18校が選定されています。

和歌山県内では、小学校356編、中学校208編、高等学校126編で合計690編の応募がありました。そのうち県審査会において、優秀賞に34名、奨励賞に34名を選定しました。全国審査会で授賞された個人および団体、県審査会で授賞された個人の皆様、誠におめでとうございました。

また、全国審査会および県審査会の結果は、和歌山県NIE推進協議会HP（https://nie.kiimin-po.jp）に掲載していますのでご覧ください。

第14回「いっしょに読もう！新聞コンクール」は2022年9月8日から2023年9月7日までの新聞記事を対象にして実施され、作品の提出締切りは、2023年9月8日（金）です。多くの学校、多くの児童・生徒の皆さんの参加をお願いいたします。

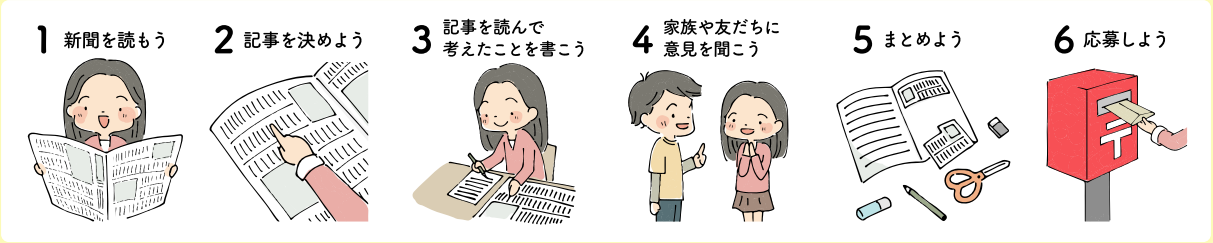
なお、応募の詳細については、日本新聞協会NIEホームページ（https://nie.jp）をご覧ください。

三原 菜結さん

※写真掲載は保護者の了解を得ています

第14回 いっしょに読もう！新聞コンクール

日本新聞協会は、今年も「いっしょに読もう！新聞コンクール」を実施します。
家族や友人といっしょに記事を読み、感想・意見などを書いて、記事とともに応募いただく新聞感想文コンクールです。



●応募締め切り：2023年9月8日（金）必着

●対　　象：小・中・高校・高等専門学校生
●募集要項：2022年9月8日～2023年9月7日の新聞協会加盟社等が発行する新聞から興味を持った記事を切り抜き、
家族や友だちにも見せて意見を聞いたり話し合ったりしたうえで、応募用紙に記入して記事といっしょに送ってください。

主　　催：一般社団法人日本新聞協会　　コンクールの詳細（応募・問い合わせ先、対象紙一覧 など）▶NIEウェブサイト　https://nie.jp